

「上海都市研究新動向」

国際学術研討会の参加記(1)

寒さが目立ち始める11月、そんな寒さが吹き飛ばすようなあつい日中学術討論が11月9日―11月10日の2日間に渡り、上海社会科学歴史研究所にて行われた。該会議に幸運ながらも参加させて頂き、多くの方が発表される中、僭越ながら自身のハルビン都市研究に新しい視点のヒントを頂いた印象に残った発表をいくつか特筆したいと思う。

王敏―「本地化与地方化：以英国的租界华人代表权问题路线的贯窃为中心(1919―1930)」の発表では、租界における華人権力には「土地」が大きく関わっているという事が分かった。土地を多く所有している者が高級階級であり「租界納税人会議」の議席と発言権を獲得し、法を作る側にいたという事が分かり、これを英国は認めていたという事実を知った。同様にハルビンにおいて日本、ロシア、ユダヤ、華人の権力関係はどうであったのだろうかという

興味が湧いた。

続く渡辺千尋の「国権回復運動下の上海共同租界と在華紡」では主に日本人居留民、在華紡に焦点を当てた発表となっていた。該発表においてもやはり権力と資本が関連付いており、経済的な側面から上海における日本人の立場、対中政策等を考察していた。発表を拝聴し、同様に当時ハルビンでの経済においてはユダヤ人の勢力が強く、これと他国、華人の勢力を比較したら良いのではないかというヒントを頂いた。

個人的に着眼点に驚いたのは陸烨の「近代上海城市汚染の治理与讨论：以分类营业制度为例」である。この発表では詳細に当時の各種騒音問題、環境汚染問題が取り上げられ、これを対処すべく「分类营业委员会」が設立され厳しく監督し、当時上海の都市としての「超前性」が伺えた。個人的にハルビン都市研究を行う上で「環

境問題」には注意が及ばず、都市における文化形成、発展において確かに環境問題は重要な部分であると気付かされた。

以上3名の方々の発表を拝聴、勉強させて頂いた事により、自身の研究に新たな視点、論点を創造出来たように思う。上海とは少々状況は違うが、多国籍人が居住していたハルビンにおいても同様の状況は無かったかを知る、知ろへとさせて頂いた発表でした。勉強させて頂けた事、改めて御礼申し上げます。

外国語学研究科中国言語文化専攻(博士課程2年) 李 美大一



国際学術検討会の参加記(2)

今年の11月9日〜10日の二日間、「中国・上海都市研究新動向」国際学術会議が上海で開催された。私は通訳として神奈川大学非文字資料研究センターからの派遣という形で、今回のシンポジウムへの参加の機会を得た。そこで今回の学会が開催された背景を紹介してみたいと思う。

2008年から神奈川大学非文字資料研究センターを中心として「東アジアの租界と居留地」を取り上げた研究プロジェクトが精力的な活動を展開し、2017年には上海社会科学学院歴史研究所と神奈川大学非文字資料研究センターとの間で、交流協定が締結された。今回の会議ではこれらの研究成果を振り返りながら、今後の上海史研究、そして中国都市研究が目指すべき様々な可能性についての相互の新たな研究動向を紹介し、討論した。

今回の会議への参加で、私は上海、また近代中国に関する最先端の研究に触れることができて

とても勉強になるほか、最も感銘を受けたのは、学者が何十枚の紙にまとめた論文から何十年、更に何百年もまえの世界を覗かれたことである。

初日目の午前の開会式における講演は、上海社会科学学院歴史研究所研究員、陳祖恩教授による「大谷光瑞と西本願寺上海別院、無憂園—上海日僑社会の生活空間を中心に」で、共同租界の時期、大谷光瑞が上海でつかさどって創立した寺と庭園を糸口にし、当時日僑が上海での主な集会の場所およびその活動内容を含む「日本人街」の様相を詳述してくれた。例えば、十九世紀五十年代、「文路」と呼ばれた大通りが上海「日本人町」の虹口にあった。そこは日本人町の中心市街地となり、市場から高級料亭まで、更に日本人倶楽部や病院などの施設も揃っている場所であった。また「無憂園」という一万坪も占める大きな遊芸園で、春には桜を見る会、秋には菊を見る会が行われることが分かった。こんな風に、半世紀以上も前から

外国語学研究科中国言語文化専攻(修士課程1年) 蘇健

て存在していた「空間」を、行間から立体化して呈してくれたことに、とても醍醐味を感じた。

そして、私が通訳を担当した、神奈川大学国際文化交流学科の菊池敏夫教授の「南京路の『再開発』と中国(上海)人の百貨店文化」で、百年前の上海での中国人の娯楽—「百貨店」文化を明らかに示してくれた。そこで私的に小さな発見があった。それは百年前と今現在、娯楽に対する人々の発想、また娯楽のかたちは意外に似通っていたことである。1910年代〜20年代半ばまでに独立自営の商人や俸給生活者の一定の蓄積があった人、いわゆる「新中間層」が上海で登場した。当時の新中間層向けの「大衆消費」や「娯楽」を提供するため、1910年代末、香港の巨大華僑資本による百貨店が上海南京路に創立されていた。これによつてはじめて上海の新中間層向けの消費生活、娯楽における「コア」空間が形成された。菊地氏の研究によつて百貨店は華麗な外観を持った